

文化と交流

No.1 / 2013 年 10 月

特集 ふるさとの海と渚



周防大島文化交流センター

「あいさつ ―『文化と交流』のリニューアル刊行にあたって

周防大島文化交流センター

平成一六年五月に開館した周防大島文化交流センターは来年で一〇周年を迎えようとしています。

開館から半年後には東和・橘・久賀・大島の四町が合併し、それを機にセンターの活動を広く地元の皆さんに知ってもらおうと『文化と交流』を発行しました。その後、一時休刊していましたが、ここに装いも新たに刊行にすることにいたしました。

再刊行を企画したのはいくつか理由があります。

まず何よりも、周防大島の歴史・民俗・自然環境についての情報をいっそう発信し、町内はもとより、全国あるいは世界の人びととこれらの情報を共有することを願うことです。周防大島を中心とした瀬戸内地域をはじめ農山漁村の生活変遷、豊かな自然に囲まれた周防大島の環境、さらに本センターが所蔵する宮本常一関係資料に関する調査・研究の成果を紹介していくことができればと思っています。

また、その情報発信の担い手として本年度から活動をはじめた地域交流員の皆さんに期待するところが大きくあります。

これまでは毎月刊行し情報通信としての役割に重きを置いておりました。リニューアルにあたっては年に三回程度の刊行を目標として、より「読み物」としての性格を強めた編集を心がけております。

本誌がより多くの方にご愛読いただき、また周防大島を中心とした生活文化の発見につながることでできれば幸いに存じます。

目次

〈表紙裏〉

特集
ふるさとの海と渚

・古写真の風景をあるく(二) 渚の近代化 ― 周防大島三ヶ浦 ― 高木泰伸

・「海」を生かした体験学習・・・・・・・・山根一史

・物づくり企画展「船大工用具と木造船」の展示設営始末記・・・・・・・・森本孝

・書誌紹介 森本孝『舟と港のある風景』／浜口哲一『海辺の漂着物ハンドブック』……………

コラム 周防大島の窓

・六月の朝の風景・・・・・・・・・・・・・・
舛田良樹

・お盆の石風呂入浴体験記・・・・・・・・山本康文

[illegible]

活動記録

・周防大島文化交流センター日誌（平成二五年四月～八月）・・・・・・・・・・

〈裏表紙〉

「特集 ふるさとの海と渚」にあたって

周防大島は周囲を豊かな海に囲まれ、その海の恵みを糧にした人びとの営みがあります。いま私たちの前に当たり前にある海にはさまざまな歴史があり、そしてこれからも変わっていくことと思います。本町はそのような海にまつわる資料（写真・民具・文書）を多数所蔵しており、また自然環境を生かした各種の体験学習を実施しています。

この「特集 ふるさとの海と渚」では、そのような資料を用いた調査研究の成果、周防大島の自然環境を生かした取り組みを紹介しようと思ひ企画いたしました。

高木論文は、宮本常一写真を中心に写真資料から、渚の変遷を読みとろうとした小論です。身近な地域の風景から高度経済成長の地域開発を考えようと試みています。山根論文は文化交流センターが「海」をテーマに開催した体験学習を紹介しています。海の環境を考え、その魅力を次の世代へ継承していくとする企画の報告です。

さらに現在、八幡生涯学習のむらで開催中の企画展「船大工道具と木造船」によせて、同企画をプロデュースされた森本孝氏からご寄稿いただきました。展示準備からの取り組みを紹介いただいていますので、ご一読いただければこの企画展示をより深く鑑賞いただけるものと思います。

また、書誌紹介では、森本孝著『舟と港のある風景』、浜口哲一著『海辺の漂着物ハンドブック』の二冊を取り上げております。いずれも渚をあるく手引き書となるものです。

瀬戸内海は多様な問題設定が可能であり、豊富な研究の蓄積と多様な学習会が開催されています。本特集もまた瀬戸内海の過去・現在・未来を考える一助となれば幸いです。



長崎の集落の前には広い干潟が広がっていた 昭和 36 年 4 月／宮本常一撮影

古写真の風景をあるく（一）

渚の近代化 ― 周防大島三ヶ浦 ―

高木 泰伸

周防大島の東部、いま道の駅サザンセトとうわ、東和民具収蔵庫や陸上競技場が建ちならぶ付近を地元では三ヶ浦という。西方、長崎、下田の三つの集落からなるが、家々が軒をならべ土地の人でなければその境はわからない。この三ヶ浦の沖合はもと干潟の広がる海だった。干潟には子供たちが雑魚をとって遊び、また天気の良い日には老女たちが浜にムシロを敷いて手仕事をしつつ談笑していたという。

野村妙子さん（昭和二九年・下田生まれ）は幼少期の思い出としてこんな話をしてくれた。

「私のうちは下田でしたが、祖母の実家が長崎にあつてすぐ裏手が海でした。毎週日曜日にはいつも遊びに行っていましたね。夏には潮が満ちると子供たちみんなで石垣から足を投げ出して、海につかったのですよ。もちろん海水浴もしました。それからお盆の時期には親族が集まるでしょう。すると写真が趣味だった父は



浜での記念撮影 昭和30年代前半／後藤清人撮影



民家の石垣。家々が海に面していた 昭和31年6月



右写真の現在、公民館などが建っている



下田八幡宮の石灯籠。屋には真宮島と神ノ崎 昭和31年

カメラを持ってきて、潮の引いた浜辺で記念写真を撮ってくれたんですよ。」(二〇一三年八月二十五日聞き書き)

渚が生活空間の一部であった時代の体験は、野村さんにとって家族とのかけがえのない思い出という。

しかし台風や潮が高くなると軒先を洗うことがしばしばで、時には農地に海水が浸入することもあったという。そのため、昭和三〇年代半ばには防波堤を築き、さらに埋め立てで自動車道が通るようになった。当時発行された『東和広報』には、この海岸線防波堤工事が、まず県営の白木港(下田)海岸地盤変動対策事業として昭和三三年度に着工し同三五年度に下田海岸防波堤が完成、翌三六年度には長崎海岸防波堤工事が着手され、さらに東側の平野・森野地区の防波堤工事、漁港整備も同時期に進められていった様子が記されている(※1)。完成した下田地区の防波堤の写真を掲載して「これで台風にも大丈夫」と伝えている。

三ヶ浦の防波堤工事、自動車道路敷設は高度経済成長期の地域開発のなかで行われたものとして捉えることができる。ほぼ同じ時期の昭和三八年二月には「大島瀬戸架



干潟を埋め立てて車道をつける 昭和 38 年 10 月



埋立工事がすすむ長崎の集落前 昭和 37 年 6 月



この後、さらに埋立がすすむ 昭和 51 年 12 月



車道が完成する 下田付近 昭和 51 年 4 月

橋期生同盟会」が発足し、本土との架橋の機運も高まっていた。『東和広報』は架橋の機運を盛り上げるため「大島瀬戸に大橋を架設し、大島郡内の道路および東端伊保田港の港湾施設を整備して、愛媛県松山市を結ぶ路線を国道に編入すれば、四国縦貫道路と中国縦貫道路を西において結ぶ最良の産業道路、観光道路となり、近く新設される新山陽道路とも有機的な効果を高め、四国と九州の縦貫道路も最短距離において結ばれる結果となり、大島瀬戸架橋は政治、経済、文化などの面において計り知れない大きな役割を持っています」〔※³〕と呼びかけている。

大島大橋架橋は好調であったミカンの島外への輸出という経済面から期待は特に大きかったようである。例えば、山口県が行った大島架橋の経済調査報告書では、「本島の果実はみかんで、大島みかんとして特にとくに東京市場で声価を得ている。三五年度栽培面積は九七七町、全耕地の二九%を占め、栽培農家も全農家の三分の二に当る。栽培農家一戸当り面積一、七反、過半数の農家は三反以上を栽培し、本島の主産化した商業的農業として完全に地歩を確立している。各町でもみかん園の拡充に

極めて積極的に将来大島町は四倍強の六〇〇町、久賀町は三倍の四〇〇町、東和町は二倍強の八〇〇町、橘町は二、三倍の七〇〇町への拡大を目ざしており、予期通りに進んだ場合は既存耕地の四分の三はみかん園になることとなる。反収も平年で八〇〇貫と言われるが、将来は一千貫に向上するものとすれば収穫は四五〇四八年頃には九四千屯、現在（一五屯）の六倍強となる。しかし、本島のみかん栽培の隘路は搬出を船に頼らざるを得ないことで、天候による計画出荷の擾乱、荷傷み、運賃の過大負担等が問題となっており、自動車による本土直接輸送が強く期待されている」と述べられている（※4）。

このような大島架橋の構想を念頭におけば、三ヶ浦の海岸道路も防災、生活道路というだけでなく、周防大島東部のミカン産業の振興、流通網整備という期待もあったと推測される。未だ十分な資料調査を行っていないので、この海岸道路がいつごろ現在のような車道ができたかは把握していないが、宮本常一が撮った写真をみると昭和五〇年代にはほぼ現在と同じ道幅の道路が整備されたようである。

さて、この当時は立派な道ができることは地元にとつ

ても誇らしいことであつた。そんな空気を感じていたのか、野村さんは海岸道路が出来たときを回想して、「新しい道が出来たとき、そこが自転車の練習にいい場所でした。それまでの道っていったら曲がった道ばかりですよ。だから舗装されたまっすぐな道が出来たときはうれしくてね、どこまでつづいているのかって妹と一緒になつて思いっきり走りましたよ。今考えると危ないですが、新しい道は私たちのいい遊び場でしたね」と話してくれた（二〇一三年八月二五日聞き書き）。

三ヶ浦長崎に生まれた宮本常一はこの海岸の埋立について次のように述べている。

「和歌山沖に南海地震というのがあり、東瀬戸内海はかなりにはなはだしい地盤沈下があり、満潮時の海水浸入を防ぐために防波堤を築くようになった所が多い。長崎という所も秋の台風期に海水が水田に浸入することがしばしばあったので、その対策がいつも話題になっていた。だから村の人たちは防波堤ができるのを喜んだ。けれども私は不満だった。『今にかならず自動車時代がくる。そのとき村の中の道をひろげるのはむずかしい。するとどうしても海の方へ道をつけねばならぬ。いま防波堤を作



長崎～下田に完成した防波堤。海をながめる古老、子供たちが遊ぶ 昭和 37 年 11 月／宮本常一撮影

つておくとそれが邪魔になる上に無駄になる。それほどならば、海岸にバイパスのとれるほどの埋立をすべきで、そういう予算のとれるまで待つことにしたらどうだろう」と柳居（宏俊）君（※5）のところへ話にいった。それから一五年も待った。一五年目に希望通りの予算がつくことになった。

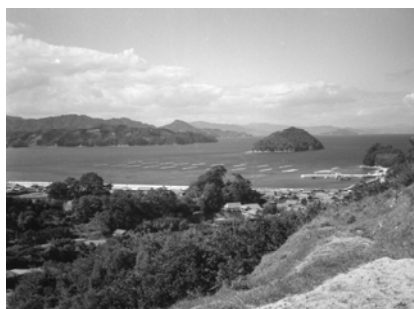
浜がなくなると子供たちの遊び場がなくなり、また海水浴ができなくなる。しかしそれもやむを得ないであろう。考えてみると、私の子供のときからでもずいぶんと変っている。つまり今から六〇年近く前までは浜ももつと広がったし、砂も多かった。」（※6）

宮本は旅先からふるさとへ帰る度に変わりゆくその姿を写真に記録しつつづけている。彼が残した一〇万枚の写真のなかでもこの三ヶ浦周辺を写したものが最も多いのではないか。

特に海岸線の変化は丹念に記録している。そのなかに防波堤が完成した時を写した一枚は見る者の心を小波立たせる。子供たちが戯れる夕暮れ、埋め立てが進む防波堤にたたずむ老人は慣れ親しんだ海が変わりゆく姿に思いを馳せているように見え、宮本の心情がその老人の姿



現在は埋立地にスポーツ施設や観光施設が建つ



三ヶ浦の山手から海を望む 昭和 38 年 10 月



三ヶ浦の集落には昔の防波堤の石積みが見られる



防波堤の跡。ここがかつての海岸線だった 長崎

と重なりあっているようである。砂浜が埋め立てられる様子を時代の記録者として撮影する宮本常一がいる一方で、故里を心から愛する宮本の姿も写真に写り込んでいるように思われてならない。人びとの暮らしに革命的な変化が起こっていた時代、故里もまた変革の時にきていたことを考えて未来を見据えつつも、在りし日の故里の姿が宮本の脳裏をかすめていたのではないか。

この後、埋立はさらに進んで先に述べたような観光施設、文化施設が立ちならぶ景観が形成された。宮本のいうように長崎の浜で防波堤を越えて泳いでいる子供見かけることはない。それは少子化の影響もあるだろう。しかし、沖合の真宮島の磯では網を手にして水面を覗き込む親子をしばしばみかける。確かに狭くなったとはいえ、この付近には豊かな海がある。そして海岸道路は車社会を迎えた今日において、東和地区の生活、物流を支える動脈の役割を果たしている。またこの地を余暇に訪れる人にとっては観光道路として役目も果たしている。

旅行先から帰った近所の古老が「やっぱりここが一ぱんええ。海を見んとうも落ちつかんでねえ。はあ、やっぱ海が近くにあるいうんはええもんよねえ」と話して

くれたのが印象的だった。海の豊かさを生かしながらの
開発をこれから先は考えなくてはならないだろう。

先日、印南敏秀氏（愛知大学）と佐竹昭氏（広島大学）
から三ヶ浦の集落をめぐった感想を伺った。お二人は、
中世から現代までの景観がしっかりと残っているのが、
三ヶ浦ではないかと指摘された。つまり、西方を中心に
山側に農家が点在する中世的景観、そして人口の増加に
ともなって形成された家々が軒を連ねる下田・長崎の近
世的景観、そして埋立が進み自動車道路が整備された近
代的景観、さらに沖に観光施設や文化施設が立ちならぶ
現代的景観ということである。なるほど、身近な暮らし
のなかにこそ、そういった人間の営みがつくる歴史的景
観を見出すことができるのである。それは古写真をと
いうちよつと昔の風景をみることで、さらに実感へと変わ
っていくのではないか。とりわけ今日においては、開発
と環境という我々が直面している問題がある。これから
向き合っていかなければならない課題を考えるきっかけ
を、ここに掲げる古写真は我々に問いかけているように
思える。（文化交流センター学芸員）

〔脚注〕

※1 『とうわ広報縮刷版』第一巻、東和町役場、一九
八五年。

※2 前掲『とうわ広報縮刷版』二四三頁、昭和三五年七
月号。

※3 前掲『とうわ広報縮刷版』四〇〇頁、昭和三八年一
〇月号。

※4 『大島架橋経済調査報告書』山口県、昭和三九年（山
口県文書館所蔵、請求番号：六〇総務―三二一）。

大島大橋架橋の着工は昭和四六年、完成は昭和五
一年である。

※5 柳居宏俊（一九〇八―一九六六）。神宮寺住職で宮
本とも親交が深かった。白木村村長、山口県県議
会議員を歴任。

※6 宮本常一『私の日本地図9 周防大島』（宮本常一
著作集別集、未来社、二〇〇八年）

〔付記〕本稿で掲載している写真は断らない限り宮本常
一撮影写真である。またカラー写真は「古写真
の風景をあるく」などの企画の際に筆写及び参
加者が撮影したものである。

「海」を活かした体験学習

山根 一史

はじめに

本年五月から、文化交流センターで勤務しはじめて、すでに三ヶ月がたった。その間、私は、何度か小・中学生を対象とした体験学習に携わらせていただく機会に恵まれた。

今回、報告するのは、八月五日から七日までの三日間にわたって行われたひろでん中国新聞旅行社主催のちゅーピーこどもツアー・海藻しおりづくり体験と、同月二〇日に当館主催で実施した海の漂着物調査についての活動である。

前者のねらいは、しおりづくりを通じて、児童たちに海藻そのものやその特性（ノリ成分）についての理解を深めてもらい、楽しみながら子どもたちの創作意欲を育む点にある。

後者は、調査への参加を通じて、沿岸地域住民の海にゴミを捨てない心、海の環境を守ろうとする心を育む点にある。

これら二つの体験学習に共通するテーマは、ずばり

「海」である。今更言うまでもなく、周防大島は四方を海に囲まれた環境にある。海藻と漂着物。アプローチの仕方こそ違うが、大島の地理的特性を活かした体験学習の例として、二つの事例を紹介する。

海藻しおりづくり体験

八月五日から七日の三日間、当館のセンター研修室にて、ひろでん中国新聞旅行社主催のちゅーピーこどもツアー・海藻しおりづくり体験が行われた。時間は四〇分、一日二組（一組四〇名程度）、三日間を通して計二四七名（五日：八三名／六日：八二名／七日：八二名）の児童が交流センターを訪れた。

海藻しおりづくりには、まず事前準備として海藻の採取がある。海藻の採取は、春先が最も適している。理由は海藻の種類も多く、色もよいからである。今回は、地元の漁師の方のご好意で、アオサ、フノリ、テングサの三種類の海藻を主にご提供いただいた。テングサは乾燥して、その他の海藻は冷凍して保存しておいた。

会場の設営は、まずホワイトボードに海藻しおりのつくり方を書く。今回は参加者に小学生低学年がいること



まずは海藻しおりの作り方を説明



トレイに入れた海藻。保冷剤で冷しておく

も考慮し、漢字には全て振り仮名をふった。作業台は、会議用長テーブル二脚をつなげて、その上に新聞紙を敷く。新聞紙の上には、真水をはった調理用トレイを置き、中には海藻と保冷財を入れておく。保冷財を入れておくのは、海藻がふやけてしまわないための措置である。

机の上には、使用する備品として、しおりとなる台紙、サラシ（二〇×二〇センチサイズに切断したもの）、二五×二五センチサイズに切った新聞紙、ビニール袋、爪楊枝、油性マジックを人数分セットした。今回は、グループを七班に分け、備品は各班七名分でセッティングした。

まず、バスでやって来た児童たちをセンター玄関で出迎えた後、センター研修室に誘導。その後、児童たちを

会場を取り囲む大きな円になるように整列させ、参加スタッフの紹介に移る。続いて、しおりづくりの説明に入る。

海藻しおりづくりには、いくつかやり方があるが、今回児童たちに体験してもらったつくり方は以下の通りである。

① 台紙に名前を書く。

② 海藻を真水で洗い、塩分やゴミを洗い落とす。

※塩分やゴミがついていると、海藻から出るノリ成分の邪魔になってつきにくくなる。

③ 台紙の上に海藻をのせて形を整える。

※台紙も海藻も水につけたままできるとシワができにくい。

④ 海藻をセットしたら、サラシで覆い、さらに新聞紙で包む。

※海藻を重ねるとくっつかないので注意。

⑤ 新聞紙で包んだしおりをビニール袋に入れ、袋の上からも名前を書く。

⑥ 目の当たらないところで、辞書などのオモシを置いて、均等に力が加わるようにして、

海藻のノリ成分がゆつくりと出ていくようにする。

⑦毎朝、新聞を取りかえ、三日目にしつかり乾いたら
出来上がり。

説明の後、子どもたちのグループ分けをする。整列した児童の肩を順番に叩きながら、指導員が一班、二班、三班：という風に番号を告げ、七班に分ける。児童たちは呼ばれた番号の机に分かれ、いよいよしおりづくりの開始である。

指導員一人あたり、二〜三班を担当し、児童たちにしおりづくりの補助・助言をする。海藻が重ならないよう注意させながらも、子どもたちの自由な創作活動を妨げてはならない。「つかず、離れず」。指導にはそういった微妙な距離感が求められた。

今回、特に気をつけなければいけなかった点は、しおりが当日完成しないという点である。先に挙げた工程というなら、当日できるのは工程⑤までで、⑥以降は子どもたちが家に帰ってからの作業となる。そのため、この点は全体説明ではもちろん、各班に分かれてからの際にも十分説明する必要があった。

しおりづくりが終了したら、再度児童たちを大きな円

に整列させ、指導員より別れの挨拶をし、解散となる。

三日間、指導員として参加させていただいた私自身の
実感として、一番驚いたのは児童の意欲の高さである。

実際やってみるまでは、テレビゲームや携帯ゲームに慣れ親しんだイマドキの子どもたちが、どこまで真剣に取り組んでくれるか半信半疑な面があった。すぐに飽きてしまうのではないかと私自身考えてさえいた。それは杞憂であった。思った以上に児童たちは真剣に取り組んでくれていた。いざ、しおりづくりが始まると、それまで騒がしかった子どもたちが静かになり、一時、シーンとなった時間帯もあった。海藻を台紙びつしり配置する子。緑のアオサと茶色のフノリを木々の幹と葉っぱに見立てる子など。参加した児童たちはそれぞれ個性を發揮しながら、世界で一つだけのオリジナルしおりを生み出してくれた。このことは、イマドキの子どもはこうだといった誤った固定観念を持っていた私自身、おおいに反省すべき点であった。

もう一つ気づいた点がある。想像以上に子どもたちが海藻について知らなかったことである。しおりのつくり方を説明する際、海藻を

見せながら児童たちにその名前を尋ねたが正確に答えられた子はほとんどいなかった。アオサはほとんどの子がワカメと答えていたし、テングサがトコロテンや寒天の原材料になることを説明すると子どもたちは驚きの表情を浮かべていた。海藻の表面がヌルヌルしていることも、今回触って初めて知った子もいたようである。本来なら、子どもたちが遊びを通じて自発的に自然と触れ合っていくカタチが理想だが、昨今ではそれも難しい。海藻しおりづくりを通じて、子どもたちが自然と触れ合う機会を提供出来た点は、この活動を行った一つの成果であったように思う。

海の漂着物調査

八月二〇日、逗子ヶ浜海水浴場を会場に、当館主催の体験学習「海の漂着物を調査しよう!」を行った。時間



しおり制作に取り組む児童

は、午後二時から四時までの二時間、城山・森野・和田小学校の三校合わせて一四名の児童が参加した。児童は事前に三つの班（一班：五名／二班：四名／三班：五名）にグループ分けしておき、各班に高学年児童一名を入れ、班長とした。

逗子ヶ浜海水浴場は周防大島の東部・和田地区に位置。北向きに面し、東西に細長い砂浜を持ち、夏は海水浴場としてにぎわう。砂浜奥に生えるマツやウバメガシが生み出す木陰は、暑さを避ける休憩場所として利用できる理想的な条件を備えていた。

調査当日。まず、児童たちを木陰に敷いたブルーシートの上で大きな円になるように整列させ、スタッフ紹介、調査手順の説明、注意事項の確認を行った。

今回行った調査の大まかな手順は以下の通りである。
①砂浜に児童が横一列に並び、両手を広げた間隔（Ⅱ



調査場所を選んだ逗子ヶ浜海水浴場

調査範囲）で立つ。

② 児童は、各自小さめのビニール袋を持ち、波打ち際に向って一直線に調査範囲の漂着物を拾っていく。収集する時間は三〇分。

③ 班ごとに漂着物を一ヶ所に集め、種類ごとに分類。どの漂着物がどれだけあったか「調査記録用紙」に記入し、表①に応じてポイントを集計する。

④ 最後に、班長に結果発表をしてもらい、ポイントの最も高かった班を表彰。

基本的に調査の方法は、『広島県海岸・干潟生物調査マニュアル「改訂版」』（広島県、二〇〇六年）に従った。

プラスチック・ビニール類		自然のもの	
	ポイント		ポイント
かけら	1	流木	5
ビニール袋	3	木切れ	3
釣り糸	3	貝殻	3
ペットボトル	5	藻そう	3
その他 プラスチック類	5	ぼくわしがつけた 面白いもの、変わったもの	
釣り用品 (釣り針、フックなど)	3	全て	5
カキ養殖に使うもの (パイプ・リング)	3		
ふた	1		
金属			
かけら	1		
空き缶	5		
スプレー缶	5		
その他			
かけら	1		
ガラス・お茶わん類			
ガラスのかけら	1		
お茶わんのかけら	1		
ガラスびん	5		

ただし、低学年の参加者も多く、児童に一連の活動をゴミ拾いと思わせないよう、ゲーム感覚や遊び感覚を取り入れるべきと

考えて、漂着物ごとにポイントを設け（表①）、グループごとに競わせる案を取り入れた。そして、優勝チームには手製のステッカーを景品として渡すことにした。

当日は、連日の猛暑の影響もあり、砂浜は肌を刺すような暑さになっていた。しかし、調査を開始すれば、児童たちは元気いっぱい砂浜に飛び出し、積極的に漂着物の収集を行ってくれた。当初、両手を広げた幅が各自の持ち場であったが、途中から子供たちは思い思いに砂浜に散らばっていった。カキ養殖のパイプばかり拾う子。高得点を目指して変わったものを集める子。中には、何かを拾うごとに「これ何点？」と聞いてくる児童もいた。

ポイントの集計作業は、集めたゴミの量が多く、私が予想した以上に難航していた。散々太陽の紫外線を浴び



暑さにも負けず漂着物を採集した



漂着物の選別・集計作業



最も多かったカキ筏の破片

て疲れた後に、
ゴミを数える
という単純で
地味な作業。
子どもたちの
集中力にも限

界が来ていたかもしれない。しかし、集計作業が進むにつれて、自分が拾ったゴミに高得点がつき喜ぶ子あり。養殖パイプのあまりの数の多さにうんざりする子。他の班の得点が気になっている子など。子どもたちはここでも様々な表情を見せてくれた。

結果発表。一班一三九二ポイント。二班九三五ポイント。三班一八三〇ポイント。優勝は三班。三班の子どもたちはさすがに誇らしげであったが、不思議と他の班の子どもたちが悔しがっている様子はなかった。目の前に積まれたゴミの山が、他の班に負けたということより「自分たちはこれだけでも集めたんだ！」という達成感を強くさせたのではないだろうか。

学習のまとめとして最後に、子どもたちには「漂着物の種類」「ゴミの漂流」「ゴミが野生生物に及ぼす影響」

についての話をした。

「漂着物の種類」については、主に人間がつくったもの（「ゴミ」と自然のもの）の二つに大別でき、後者は海辺に住む生物の食料や住み家になることを説明した。

次いで、「ゴミの漂流」については、瀬戸内海の潮流を記したパネル（海上保安庁ホームページ「潮流予測」から引用）を用意。カキ養殖に使用するパイプを例に、他所で捨てられたゴミが潮流にのって大島に流れ着くことや、逆に大島で捨てたゴミが四国の沿岸部などに流れ着く可能性について説明した。

「ゴミが野生生物に

及ぼす影響」については、紙芝居を利用した。プラスチックゴミを食べて死んだアホウドリ、釣り糸に絡まったウミガメやマンタなどの写真を見せながら、ゴミが野生生物を死に至らしめたり、傷つけたり



漂着ゴミで傷ついた野生動物たちを紙芝居で紹介

表②: 漂着物調査集計表(2013.8.20実施)

プラスチック・ビニール類						ぼく・わたしが見つけた面白いもの・変わったもの											
	数			ポイント				数			ポイント						
	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)		(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)				
かけら	4	13	9	4	13	9	おもちゃ部品 (プラスチック)	0	1	0	0	5	0				
ビニール袋	0	1	0	0	1	0	しょうがの袋 (中身あり)	1	0	0	5	0	0				
包み紙	0	9	28	0	27	84	ジョウロの注ぎ口 (プラスチック)	0	1	0	0	5	0				
ペットボトル	1	0	0	5	0	0	スリッパ	1	0	0	5	0	0				
その他 プラスチック容器	21	0	38	105	0	190	せんたくばさみ (プラスチック)	0	1	0	0	5	0				
釣り用品 (釣り糸・ウキなど)	3	3	2	9	9	6	陶器カマド? のかけら	0	0	4	0	0	20				
カギ養殖に使うもの (パイプ・リング)	379	260	442	1137	780	1326	トウモロコシおもちゃ (プラスチック)	0	0	1	0	0	5				
ふた	0	2	10	0	2	10	鳥の羽	1	0	0	5	0	0				
金属						プラスチックキャップ	0	1	0	0	5	0					
かけら	0	1	6	0	1	6	虫取りあみ (あみ部分のみ)	0	1	0	0	5	0				
空き缶	0	0	2	0	0	10	ライター	5	1	0	25	5	0				
スプレー缶	0	0	0	0	0	0	おもちゃの ラグビーボール	0	0	1	0	0	5				
発砲スチロール						合計	448	327	612	1392	935	1830					
かけら	4	2	12	4	2	12											
ガラス・お茶わん類																	
ガラスのかけら	0	5	12	0	5	12											
お茶わんのかけら	0	5	1	0	5	1											
ガラスびん	1	0	0	5	0	0											
自然のもの																	
流木	1	0	1	5	0	5											
木切れ	22	17	42	66	51	126											
貝がら	3	3	1	9	9	3											
海そう	1	0	0	3	0	0											

※表中の①②③は班

※漂着物ごとのポイントのつけ方は表①を参照

する事例を紹介した。写真を一枚見せるごとに、児童たちからは「もっと近くでよく見せて!」と声があがった。

これらの写真は、どんな言葉よりも雄弁に、野生生物たちの「命がけのうめき」を子どもたちの心に訴えかけてくれたに違いない。

最終的に、海岸汚染や野生生物への悪影響を防ぐには、ゴミを捨てない努力や、ゴミを減らすリサイクル活動への取り組みが大切であるとの意見を児童たちから引き出すことが出来た。

結論として、班対抗でポイントを競わせる方法を選択したのは大成功であったと思う。ポイントを競うというゲーム感覚を取り入れたことで、ゴミ拾いという作業感をなくし、子どもたちが楽しみながら最後まで集中力をとぎらせることなく活動を終えることが出来たのは大きな収穫であった。

今回、行った調査の結果は表②の通りである。調査後の感想として、最も注目すべき点は、カキ養殖に使用されるパイプとリングの異常な多さである。表によれば、一班が三七九点、二班が二六〇点、三班が四四二点あり、他のゴミと比べても数は圧倒的である。試しに重さを量

った結果、およそ七・四キロあった。ここからは推測になるが、これらは、おそらく宮島を中心とした広島湾沿岸地域のカキ養殖筏から流れついたものではないかと思われる。全国各地で海岸のクリーンアップ活動を積極的に行っている一般社団法人「J E A N」の報告でも、瀬戸内海でのカキ養殖用パイプの漂着件数の多さを問題に挙げている。主に一四名の児童が一五分収集しただけで、一〇〇〇点を超えるカキ養殖用パイプ・リングが集まった事実からだけでも、この問題の深刻さが伺えた。

一方で、実際に活動を行ってみて反省すべき点もいくつかあった。まず、実施時期の問題。今年の夏が猛暑であったという点を差し引いても、八月の午後の砂浜で長時間ゴミを拾う作業を行うのは過酷であった。今回の調査でも当初三〇分の時間を予定していたが、あまりの暑さに一五分に短縮することになった。低学年の児童の体の負担を考えれば、こういった調査は、春もしくは秋ぐらいに行うのが適当であるとの実感を得た。

次に、漂着物の分類の甘さである。今回、事前に見下に行っており、ある程度会場の漂着物の特徴もつかんでいた。漂着物の調査記録用紙もそれらを踏まえて作成し

たつもりであった。しかし、実際集計作業を見ると、私が設定した分類から外れるものが多く、どこに分類すべきか戸惑う光景が各グループで見られた。もう少し、現場のゴミの特徴をよくつかみ、それに基づいた分類をすべきであったと思う。

最も反省すべき点は、今後の問題提起の視点が欠如していた点である。話が抽象的になるが、調査をやって終わりというのではなく、この活動を経験したからこそ新たにわいてくる疑問や興味を児童たちから引き出す工夫が不足していたように思う。例えば、カキ養殖のパイプが広島の方から潮流にのって流れてきたということを説明せず、これらはどこから流れてきたのかというのを子どもたち自身に調べさせる。漂着ゴミがもたらす問題は、野生生物に悪影響を与えるということ以外、他にどんなことが考えられるかなど。こういった感覚は、児童向けの体験学習を担当する者として必要不可欠であり、今後の課題としたい。

おわりに

以上、海藻しおりづくり体験と漂着物調査について述

べてきたが、最後に二つの活動を通じて見えてきた問題点と今後の展望について簡単に触れておきたい。

今回、漂着物調査では「潮流によるゴミの漂流」と「ゴミが野生生物に及ぼす悪影響」というように環境問題の視点を重視する指導内容になった。ただ、カキ養殖パイプの漂流については補足的な説明が欠けていたかもしれない。パイプは、基本再利用されているが、台風などで養殖筏が破損した時、各地へ流出してしまっているという。つまり、悪意があつて捨てられたものではない。あくまで「漂着物」であつて「漂着ゴミ」ではない。漂着物が流れついた大島側の視点。反対にカキ養殖業者を中心とする広島側からの視点。それぞれの立場からカキ養殖パイプの問題について考えるよう指導する必要があつた。子どもたちには単純に「カキ養殖業者＝悪」といった構図で、この問題を捉えてほしくない。

今後の展望について。はじめにの部分でも少し触れたが、今回行った二つの体験学習はアプローチこそ違ったが、核心の部分には「海」という共通したテーマがあつた。今後は、それら個別の活動を有機的につないでいく取り組みにも挑戦してみたい。例えば、海藻や漂着物を

使って「漂着物アート」を作成するといった企画はどうだろうか。海藻について知る。漂着物について考える。制作活動を通じて子どもたちの創意工夫する心を育む。学校教育という視点で捉えるなら、社会、理科、美術、図画工作といったように複数の教科にまたがるテーマを含んだ総合的な体験学習というものがあってもいいかもしれない。一つ一つの独立した活動を足したり、かけたりしながら新たな企画が生み出せればと考えている。

なお、今回の二つの活動には指導員として、福田隆司氏・舛田良樹氏・弘道就氏・田中あきこ氏（文化交流センター地域交流員）、佐野千賀氏・岡本慶子氏をはじめとする社会教育課各位、なぎさクラブ・わだつ子クラブ各位に参加いただいた。

（文化交流センター学芸員）

【交流短信】

九月一日、午前。天気は快晴。同月一日に行なわれた『おサルじや編めない竹カゴ基礎講座―竹ヒゴづくり―』で使用するマダケの切り出しに出かけた。場所は、サンスポ―ランド片添にあるグラント横の竹やぶである。竹やぶは傾斜地にあり、付近には小川が流れ、足元はぬかるんでいる。今回は参加者一人につき三メートル程度のマダケが必要で、合計で三〇本ほど切り出す必要があった。二人がかりで作業をすれば、午前中で終わるだろうと正直高を括っていた。しかし、それは大きな間違い。マダケを一本切り出すたびに、手といわず顔といわず、虫さされの数が増していく。言わずもがな、やぶ蚊の襲来である。何とか耐えようと思ったが、一度に数匹が手に止まり、血をチュウチュウ吸うのだからたまったものではない。結局、両手と顔をあわせて二〇数か所の名誉の負傷？を負うはめになった。九月とはいえ、竹やぶに入る際は、やぶ蚊への十分な対策が必要であると身を持って実感させられた一日であった。このように苦勞しながら入手したマダケを利用し、大盛況だった竹ヒゴづくり講座の詳細は次号でお知らせできればと考えている。（Y）

物づくり企画展

「船大工用具と木造船」の展示設営始末記

森 本 孝

展示用の部屋は：

展示用に使えてできる部屋は壁に穴開きボードがある四〇畳ほどの部屋、展示用に使える器材はごく普通の折りたたみ式の長机だけ…、予算はまったくなし。展示用の船大工道具はあるには…ある。八幡生涯学習のむらの管理下の久賀歴史民俗資料館付属施設の国指定重要有形民俗資料収蔵庫に、久賀の諸職道具のひとつとして船大工道具が収蔵されている。ただ、この国指定の重要民俗資料を展示するには、手続きで時間がかかるし、許可を得られるか否か不確実。要は当てにできない。さあ、どうすれば企画展「船大工用具と木造船」の開催にこぎつけられるのか…。

この八月一二日に無料公開をはじめた「八幡生涯学習のむら」の自主企画「物づくり企画展―船大工用具と木造船」の企画と展示設営は、このような状況でスタートした。懸案の展示用の予算は、町の文化振興基金に応募

することで、最低でもパネル用紙は確保できる見通しが立った。また肝心の船大工道具や木造船の写真、模型類は閉鎖中の旧大島町、旧橘町、旧東和町のものを借用できる見通しができ、また展示ケースも各資料館にあるものを借りられることになった。ただ、展示場だけは改造するわけにもいかないので、展示上の工夫がいる。

市や県立レベル以上の歴史民俗資料館、博物館ならいざ知らず、そもそも町村レベルの歴史民俗資料館で企画展示を行なうことはごく稀だ。企画展を行なうだけの予算、施設、人材の用意がないのが普通だからだ。普通、企画展はどの資料館でも力を込めて行なう。企画展の成否がその資料館や博物館の評価に直結するからだ。だから、自分の資料館に適切な資料がない場合には市、県を超えて借用もする。国レベルの資料館だと他国の資料も借りる。これらの資料の貸借は美術品輸送で行なうのだからかなりの経費がかかる。

八幡生涯学習のむらでは、とてもそんな予算も施設もない。だから、手持ちの資料や施設で出来る限りの展示をやるだけだ、そんな開きなおりで、企画と展示を行なうことにし、七月半ばに企画の具体化と展示設営にとり

かかった。

身の丈にあった展示

まず心がけたのは身の丈にあった展示だった。四〇畳ほどのひと部屋だから、大がかりな展示は無理である。

また、船大工道具は木材を加工して木造船をつくるのだから、その大多数は刃物類である。ノコやノミ、キリ、カンナなどの刃物類を好きな人もいるだろうが、一般的にはノコやノミを見ても面白くもなんともない。興味をひくには木材加工の技術の説明図を描かねばならないが、膨大な枚数になるので、それはできない。

また船大工道具といってもその大半は家大工と同じ道具である。そこでパネルで説明するのは船大工の専用道具だけにした。まず伝統的な木造船と日本家屋の根本的な構造が同じだという事をパネルで説明することにした。また、家屋と違う点があるが、それは船大工のつくる木造船が水密構造だということだ。水が漏らないように板と板を木口で接合して船体を形成するのが伝統的な和船の特徴で、それはまた西洋の木造船とも全く異なる点である。その要点を図や解説で示して意外感を演出し、船

大工がどのような道具と技術を用いて和船を成形したのか理解しやすいパネル展示を行なう。それなら興味をいだいてもらえるのではないかと考えたのである。

水漏れがしないように板をはぎあわせるため、最初に船大工ははぎ合わせる板の木口をスリノコで挽いて凹凸を少なくする。次に木口を木槌で叩き締めて圧縮した上で木口を合わせて船釘を打つてとめる。木口を叩き締めることを瀬戸内の船大工はダンジルというが、恐らく木口に弾力を持たせるといことなのだろう。木の繊維を叩いて圧縮した状態ではぎあわせておけば、船が水に浸かった時に圧縮した繊維がわずかに膨張する。それで水漏れを防ぐという工夫である。この技法を聞いたのは岡山県の牛窓港の船大工からだったが、現在久賀で唯一の造船場となった中央造船の船大工棟梁の伊藤梅芳さんは大島も同様の技術を用いたという。そこで、パネルも道具も水密構造の船を作るための特殊なノコやクギサシ（ツバノミ）類の展示を中心に行なった。

木造船の模型と写真

展示が道具だけでは面白みが少ないかもしれない。そ

こで大島にある船模型や船の写真も併せて展示することにした。大島にある船の模型は、往年の船大工が手がけたものが多く、精巧な模型が多いし、木造船への興味が多少は膨らむのではないか。それらは旧橋町や大島町の休館中の資料館にある。

あわせて、かつて大島で活動していた木造船の写真もパネルにした。私自身、昭和五六年に旧東和町の町誌の執筆に参加した時、伊保田の元廻船業者の家に、二本、三本マストの西洋型木造船の進水式の写真があり、それを接写したことがある。それらは北九州から京阪神へ石炭輸送に用いた船だった。帆船の航行スピードは遅い。元廻船乗りの当主から、帆船乗りの時代には周防大島近海で海賊に襲われたこともあると聞いて、大正、昭和の時代の瀬戸内海に海賊がいたのか、と驚いたことを思い出す。幸いなことに旧大島町の休館中の資料館には木造船の写真が何点がある。一五〇トン程度の西洋型帆船や機帆船の写真だ。旧橋町の資料館も多少保存している。それらの写真をコピーし、パネルに組んだ。

旧大島町の木造船の写真は二つの点で興味深かった。一つは小松開港で昭和初期に撮られた写真に千石船が

写っていることだった。その時代まで千石船が瀬戸内の海を航行していたのである。昭和三〇年代に宮本常一先生が大三島で撮影した写真にも、千石船の俤のある和船が写っているの、千石船は何も江戸時代だけのことでなく、現代まで残っていたわけだ。

今ひとつの興味は、これらの写真で大島での大型木造船の形式の変化が迎えたことだった。写真が進水式に撮影されたものが多いので、建造年代がはっきりとしているのである。写真によると明治から大正時代までは二本、三本マストのスクーナ型の西洋型帆船が建造されているが、大正も中頃になると焼玉エンジンとスクーナ型の帆を機装した機帆船が建造されるようになり、昭和の一〇年代にはいると、もはや帆はなくなり純粹の動力だけを推力とする木造船が建造されていた。そしてこれらの木造船がどれも北九州の港から京阪神へ石炭を運送するための船だったことがわかる。炭坑地帯の北九州に近いという地理的な条件に恵まれていたことが、大島に大型、といってもせいぜい一五〇トンから二〇〇トン程度だが、木造船を建造する造船所や廻船業を育成したと推察されるのである。

藩政時代の船大工数と木造船数の分布図

現在の周防大島には木造船を作る造船所はない。久賀の中央造船の伊藤梅芳棟梁が平成一二年に日前の久美丸二・九トンを進水させたのが最後となった。私が昭和五六年に旧東和町を巡った時には、沖家室島だけでも五軒の造船所があった。それらはすでに廃業したり、FRP船の造船所が変わっている。では藩政時代にはどれほどの造船所が大島にあったのだろうか、また何艘くらい船があったのだろうか？そんな興味が湧いてきたので、それを調べてみたら地図に示したような結果となった。

大島には廻船二四六艘、漁船七〇六艘、イサバ船一九艘、渡船一六艘、藩の御用船一艘、合計九九八艘の木造船があった。廻船は八〇〇石から一二〇〇石積みのいわゆる千石船もあるが、五〇石から二〇〇石積みの近海輸送の役割をはたした小型和船の方が多かった。大島が島であることから島の産物の移出や他の土地の産物の移送に小回りのきく小型和船が必要とされたのだろう。

これらの廻船や漁船を建造する船大工は、全島で五三軒が記録されている。これは藩から船大工職としての鑑札を受けた職人の戸数だが、おそらく船大工棟梁として

造船所を構える者の数であろうと推測される。浦々には小型の漁船も多く記録されており、棟梁が一人、弟子数名で造船する久賀の言葉でいうと浜（造船所）を経営していたものが多かったと思われる。もちろん、これらの棟梁の中には、大型の千石船を建造する大きな浜（造船所）を構えている者も何名かはいたのかもしれない。

地図に落としてみて意外に思われたのは旧橋町の目前に六一艘もの廻船があったことだ。またその隣村の由良に一一艘のイサバ船が記録されている。イサバ船とは鮮魚を運ぶ船のことである。今日の日前にはもちろん漁港があり、ナマコの桁曳網漁など盛んだった土地がらだが、藩政時代には漁船数の四倍弱もの廻船があり、廻船業の村だったのである。油良にしても漁船数六艘に対して一一艘ものイサバ船があるのは、久賀他の周辺の村の一本釣の釣った鮮魚を広島や松山の三津浜への輸送を一手に引き受けていたのかもしれない。船大工にしても油良に六軒もあったことなど、今日では想像できないことだった。この藩政時代の周防大島の旧村地図には、大島の住民の方々も興味を示してくれるのではないか、と思っている。

周防大島天保12年(1841)年の船大工軒数・和船数



* 各村の船大工数は藩から船大工職れを付与された船大工の軒数です。当時の造船場数とほぼ同数と推測されます。
* 出典:『防長風土注進書』

木造船の今は

漁船がFRP（強化プラスチック）で建造されるようになるのはヤマハ発動機がFRPによる和船型漁船の製造を開始した昭和四三年以後である。短期間で造船できることや、摩擦に強く、手入れが簡単だし、固い物にぶつかって割れることがなければ半永久的で、中古船になっても価格落ちがしない、ということなどで急速に普及した。

私が旧東和町の漁港を見て歩いた昭和五六年には、港には沢山の木造船が係留されていた。しかしそれからすでに三〇余年が経過している。もう現役で漁業に使われている木造船はないだろう、と思っていたが、中央造船の伊藤梅芳棟梁は、安下庄の漁民は木造船を大事に使



開催中の企画展「船大工用具と木造船」



来場者に展示を解説する著者

っているから、まだ何艘も木造船があるよ、と教えてくれた。そこで早速、日前や安下庄の漁港を見て回った。

日前では久美丸の他にもう一艘同じナマコ桁網を引く漁船が係留されているのを確認した。また安下庄の港には何艘もの木造船が係留していた。安下庄の小柳造船などで建造された船だった。進水後三二年、三五年を経た船もあり、四〇年を経た船もあった。船大工が船材を吟味し、丁寧に作り、船主がこまめに手入れすれば木造船は長く使えるものだという。木造船の寿命も思いのほか長いのである。昭和初期の小松開作の港に江戸時代を思わせる千石船が係留されているのも、宮本先生が昭和三〇年代の大三島で千石船の写真を撮っているのも不思議ではなかったのだ。

※※※

身の丈にあった船大工道具と木造船の展示設営だったが、設営中に浮かんできた思いつきも多く、実は身の丈以上の収穫を得たのではないかと思う。それを今は温めているので、十一月に予定している展示関連講座の機会にご披露できるようにしたいと思っている。

（元日本観光文化研究所所員）

※関連講座のご案内

「船大工道具と木造船の世界」

講師…戎谷和修（元三浦小学校校長・民謡採集者）

森本 孝（元観光文化研究所所員）

日時…平成二五年十一月一七日（日）

午後二時～四時

場所…八幡生涯学習のむら 町衆文化伝承の館

主催…宮本常一資料保存研究協議会

後援…周防大島町教育委員会

入場料…無料

【お問い合わせ】

・八幡生涯学習のむら

〒七四二—二三〇一

山口県大島郡周防大島町久賀一〇二—

TEL…〇八二〇—七二—二六〇一

Mail … bz270361@bz04.plala.or.jp

【書誌紹介】

しおかぜ薫る一冊

・森本孝『舟と港のある風景』

（農山漁村文化協会、二〇〇六年）

波の音、潮の匂いが行間に漂う。漁村民俗研究家の森本孝さんが日本各地をめぐる旅の記録である。旅のはじめは宮本常一が主宰する観光文化研究所で行った浦々に残る木造船の調査が目的であったという。しかし「船の発展形態や造船技術とその変化を追うだけ旅だけでは物足りなさを感じ始めていた。そして単に漁船と漁具の発展や造船技術だけの調査よりも、そうした漁船を操って海を舞台に暮らしをたててきた人々に次第に関心が湧いてきたのだった」とつづる。

丸木船を採す下北の旅、サバニを訪ね歩く糸満の旅、家船・一本釣漁を訪ねる瀬戸内の旅―。集落によって、時代によって魚種が異なり、舟も違って道具が変わる。



それによって人々の暮らしも変わる。そこに見えるのは漁師たちの試行錯誤の工夫である。本書は各地の漁法と漁民の歴史を

教えてくれると同時に、海とともに生きてきた者のライフヒストリーがちりばめられているのが本書のいちばんの魅力だろう。

著者は「かつてそこにあつたもの」を語る人びと話に耳を傾け、「いまここにある」人たちの人生を記録する。厳しい修行に耐えて一人前になつた糸満の漁師の話、舟で生まれて舟で暮らした因島箱崎の老婆の話、峠を越えて魚の行商を半世紀近くつづける越前の老女の話……。どれもこれも心にとまるものがある。それは著者自身が自らの発言を抑制しながら、語り手の言葉を巧に引用する構成の妙と言つてもいいだろう。

また枚数こそ多くはないが、本書掲載の写真も土地の息づかいを感じさせてくれ、文字で綴られる空間に色彩を与えている。海女たちが磯に集まる越前のウニ漁、飛島のタナゴの焼き節づくりやイカ干しの風景、家船が停泊する箱崎の港、沖家室の釣り鉤づくりの職人、そして木造船の数々。記録としても貴重な写真だが、そこに漂う暮らしの空気が捉えられているので読者の目を引く。

やわらかな筆の運びは森本さんの旅行記として気軽に読むことも出来るだろう。また、その土地にいつて何を

聞き、何を見て、何を撮るか、どう記録するのか、といった調査の手引き書になる一冊で、これから漁村を歩こうとする者にとっては必読の書である。(高木)

浜あるきの入門書

・浜口哲一『海辺の漂着物ハンドブック』

(文一総合出版、二〇〇九年)

一言でいうなら本書は「ビーチコーミング」の入門書である。「ビーチコーミング」とは、浜辺を歩いて流れ着いた物を拾い集めることである。

著者の浜口哲一氏は、幼少期から海辺の漂着物に親しまれている。貝殻やビーチグラスを拾い集めコレクション。拾った軽石を風呂場で使う。打ち上げられた海藻を食す。長じてからは、平塚市博物館学芸員として「漂着物を拾う会」を立ち上げ、それらに関連する著作も数多く著されている。まさに、「ビーチコーミング」を地で行くような経歴の持ち主である。



本書の構成は、ビーチコー

ミングの魅力やその実践方法の説明から始まる。最もメインとなるのは四章から構成される代表的な漂着物の写真紹介である。氏は漂着物を、①海からきた自然物（魚や貝殻など）、②海からきた人工物（漁の道具や外国製品など）、③野山からきた自然物（流木や木の実など）、④街からきた人工物（プラスチック容器・欠片、タバコのフィルターなどの生活ゴミ）に分類。豊富な写真資料を利用しながら、多くの頁を割いて漂着物の事例を紹介している。

私が本書を手にとったのは、本誌でも取り上げた漂着物調査を行おうとした時、このタイトルが目にとまったからである。実際、調査をして収集できたカキ養殖のパイプやリング、サンダル、鳥の羽なども本書では漂着物の実例として紹介されていた。八〇頁という限られた頁数ながら、標準的な漂着物の事例はかなり押さえている印象を受けた。

本書を読んで一番驚いた点は、クジラとイルカを分類①の実例として紹介していた点である。最初、クジラやイルカを入門書的な本書で漂着物の例として取り上げるのは新鮮だった。しかし、本年七月、千葉県市原市の岸

壁にナガスクジラの死骸が漂着し、ニュースで話題になっていたことを思い出した。瀬戸内海でもスナメリが浜辺に打ち上げられる例は決して珍しくない。そう考えると、クジラやイルカをあえて取り上げたのは、漂着物に親しんできた著者ならではのこだわりというか信念のようにも思えてくる。

氏は、「ビーチコーミング」の楽しみは「それぞれの漂着物が語りかける話に耳を傾けること」と述べている。人にはそれぞれ歩んできたライフヒストリーがある。それと同じく漂着物にも海を漂い、浜辺に打ち上げられるまでの「モノ語り」がある。人と同じく、何気ない漂着物の一つ一つにもドラマがあるに違いない。どんな経緯を辿ってここまで来たのだろうか？そんな思いをはせてみるのもいい。「ビーチコーミング」に興味のある人、これから「ビーチコーミング」を行おうとする人には、ぜひ手にとっていただきたい書である。（山根）

【コラム 周防大島の窓】

六月の朝の風景

舩田 良樹

人生も終盤になると、目に映る僅かな時間の風景に感動することが多くなる。毎日、同じことの繰り返しであるが、ふとした時に、それを感じる。

今日も目覚まし時計をセットして布団に入り本を読む、いつの間にか眠りにつき目覚ましの鳴る前に目を覚ます。パンとコーヒーで朝食を済ませ三〇分のストレッチをして歯磨きを済ませてウオークマンをセットし一時間のランニングに出発する。外は薄暗い。我が家のある森野の夜明け前。正面に白木山、右に嵩山、空には星が二つ弱々しく残っている。今日は城山パン屋さんの仕込みの明かりが消えているので休みらしい。片添に向かってランニング。片添から和佐に向かう途中峠が有り、そこを超えて降るとき笹島と四つ小島が望める。何時もなら漁火が三つ四つ見えるのだが今日は見えない。和佐の外灯の奥に大見山西尾根が見え、その縁取りがオレンジ色を帯び

始めている。海岸沿いを行くと和佐の港へ出るが、その途中を左折して小泊に向かう。正覚寺を左手に見て進み和田隧道を貫け降りていく。尾根の縁取りはオレンジ色を増し上空の雲は溶融して海に落ち鏡色とオレンジが交錯して近くの海岸まで続いている。この時間の此処で見ることが出来ない風景に感激する。昔、二月の大山で朝テントから顔を出すと雪原から尾根にかけて一面がオレンジ色に染まり音の無い世界に感動したのが思い出された。

海岸沿い道路を内ノ入から神ノ浦に向かい松ヶ端まで来ると地蔵様がある。そこから筏神社の奥に大見山の尾根が見え、お日様が顔を見せかける。新たな世界が始まる厳かさが辺り一面を包む。まず、お地蔵様に無事ランニングできたことのお札に手を合わせる。お日様には世界の平和を祈る。たかが地球表面一〇キロ程度の薄膜内で金と権力と名誉を廻り命までも賭ける浅はかな自分を含めた人類に無駄とは思うが平和を祈る。

お祈りを済ませ鍋島、乙小島、中小島及び前小島付近に知り合いの舟を探しながら家に向かう。家近くになると辺りは明るくなり近所に生活の音が響き始める。

これから、養蜂している蜂と野菜の状態の見回り、気温を測って養鶏場へ回り餌と水やりをする。何でもなし輪廻転生のごとき日々の朝の風景でした。

(文化交流センター地域交流員)



【交流短信】 こんにちは！東和図書館です。

秋ですね…、読書の秋、食欲の秋、そしてスポーツの秋！今年は十月の「のんたウォーキング」に谷川真理さんが、また来年二月のロードレースにはワイナイナさんがいらつしやいます。

この機会に日頃の運動不足の解消を兼ねてジョギングやウォーキングでもはじめようという方には、白鳥金丸『ウォーキングをはじめよう』や、橋本巖『女性・中高年へのジョギング、マラソンのすすめ』がオススメです。いや、まずは体をほぐして…という方には、中村格子『実はスゴイ！大人のラジオ体操』や長畑芳仁『ストレッチまるわかり大事典』はいかが？いやいや運動よりも趣味を深めたい、新しい料理に挑戦しよう、秋こそ読書ザンマイ云々、という皆さん、図書館でお目当ての本を選んでみませんか？

秋の海岸線をドライブがてら、または秋風に吹かれての散歩がてら、東和図書館へおいでませ！（M）

はじめに ―石風呂の魅力―

八月一四日、一五日の二日にわたって地家室の石風呂が焚かれた。

かつては農閑期の保養に利用されていたが、現在は地家室石風呂伝承会によって体験型修学旅行や、不定期の入浴体験に利用されている。また、福田隆司さん（文化交流センター地域交流員）が、お盆に帰省する人にも島の入浴文化を体験してもらいたいと、三年前からこの時期に焚くようになっていく。

地家室の石風呂は岩をくり貫き、手前に石を組んで石室にしている。室内は三畳ほどの広さで、一度に八人まで入ることができる。前日から石室内で木々を燃やして石を熱する。翌朝にオキビを掻きだし潮水につけたカイソウと薬草を室内にまいて、その上に厚手のムシロ、ゴザを敷く。いわばカイソウアロマ、あるいはスチームサウナといったところだろう。通常のサウナより発汗性が高く、昔から民間療法として親しまれてきた。また美容

効果もあるらしく、入浴した女性のなかには「お肌がスベスベになった」とか、「一回入れば五歳、二回入れば一〇歳若返り、三回入れば赤ちゃんの肌」と言う人もいる。

地家室の石風呂がいつ頃から焚かれるようになったかは定かでない。天保年間に編纂された『防長風土注進案』には「石風呂」の地名が見られるから、すくなくとも一九世紀の中頃には石風呂があったのではないかと推定される。国指定重要有形民俗文化財の久賀の石風呂については一六世紀にすでに利用されていた記録もあるので、地家室の石風呂ができたのも一九世紀よりもずっと遡るかもしれない。

さて、印南敏秀氏は『石風呂民俗誌―もう一つの入浴文化の系譜』（東和町誌資料編四、東和町、二〇〇二年）のなかで石風呂の価値を、地域文化の発見、自然の素材を使った癒し、さらに人びとが集まって語らう福祉的な資源としている。地家室の石風呂は生活文化と密接に関わり、周囲を緑にかこまれ、すぐそばに白木山から落ちる小川も流れており、まさに自然の癒しがある。そして、「石風呂庵」など周辺施設が整備されて人びとがゆつくりと集まって語り合う空間も整備されている。

一 炎天下の石風呂準備

今回は前日一三日の準備から手伝うことにした。

朝九時過ぎから福田さんが用意していた丸太(二〇本)、焚付けの松葉(一把)と小枝(一把)、石室に敷き詰める海藻やヨモギを運ぶ。丸太は直径が三〇〜五〇センチ、長さが一〇〇センチほどのスギ、マツ、ヒノキ。福田さんが山から切り出したものもあるし、知り合いに分けてもらったものもあるという。燃料の確保が難しくなっているが、友人が気にかけて事あるごとに燃料を確保してくれているようだ。丸太は石風呂へ登る坂道をテイヤラで運ぶ。整備されているとはいえ細い坂道は注意しないと脇の溝へ落ちてしまう。一回に五本くらいしか運べないので何度も往復する。

この後、地家室の川でセキショウを刈る。このセキショウも最近では少なくなっているが、東和地区には自生している場所が何箇所かあって当分の間は確保できそうである。三〇分ほどでコンテナに二杯を刈り取る。いつもは三杯〜五杯ほどだが、その他のものが多いので今回は二杯ほど。今回、石室に敷くのはセキショウ(コンテナ二杯)に加えて、ヨモギ(乾燥：同二杯、生：同

一杯)、アラメ・ホンダワラ(乾燥：同三杯、生：同一杯)、それにフジバカマ(同一杯)を使う。全部でコンテナ一〇杯くらいが目安で、時には稲ワラを使う時もある。アラメ・ホンダワラは大潮のときにとって乾燥して保管しているものも使い、ヨモギも春先にとって乾燥したものとあわせて使う。かつてはセキショウとアマモが使われていたが、アマモの採取が難しくなり、セキショウも確保に不安があるので、いろいろと組み合わせで工夫をしている。

お昼前の潮のいい時をみて地家室の港で潮水を汲む。一八リットルのタンクに全部で六杯。ここで午前の作業は終了。

石風呂庵の前で弁当を広げ福田さん夫婦と昼食をとりつつ談笑していると、奥井紀船さん(地家室)が大学生と高校生の娘さん二人を連れて加勢に来てくれる。奥井さんは地家室で生まれ、いま岩国で仕事をしている人で、ふるさとの生活文化を伝えなければと意気込んでいる。娘さんたちもそんな父の思いを汲んで来てくれた。真夏の照りつける太陽のもとでの作業、準備には人手が多ければ多い方がいいし、また人が多ければそれだけ会話

も弾む。二人の姉妹も実によく動いてくれ、一五時過ぎには全ての材料・燃料を運び終えることができた。

運んだ丸太は井形に組んで一〇〇センチほどの高さにする。真ん中には焚きつけ用の松葉、小枝を入れておく。

そして一晩漬け込んで薬草と海藻のエキスを出すためにセキショウ・ヨモギ・フジバカマ、アラメ・ホンダワラを潮水につける。潮水はタンク四杯を使う。これで下準備が終了。

最後に石風呂の入りの左右に塩を盛り、神酒を捧げて火の神にお参りをして火を点け、本日の作業が終わる。冷えたお茶を片手に作業した世間話をしながら、みんなで疲れを癒した。

二 会話も弾む石風呂入浴

一四日は九時半に石風呂へ行つて来客を待つ。福田さんは御接待にと、火を起こして天然の岩ガキとナスビの準備をする。

一〇時頃になると入浴する人たちが集まり始めたので、一晩焚き続けたオキビを掻きだし、タンク二個の潮水を撒いて、昨日から漬け込んでいた薬草・海藻を室の中に

敷き、エキ스가染みだした潮水をその上にかける。薬草・海藻を平らにするために室に入るとカンカンに熱した石で室内は熱気にあふれている。やっとの思いで、ムシロとゴザを敷いて準備が完了。室内の温度を計ると七〇度を超えているので、かなり熱めである。通常は六〇度前後である。おそらく強い日差しのせいで石が熱せられたのが影響したのだろう。

そこで、できるだけ短い時間で入浴をするようにして入浴する。慣れている人でも五分が精一杯。はじめての人は一分ともしない。それもまた楽しい。火照った体を近くの沢で冷やすのも気持ちがいい。

手製の薬用茶に塩分補給の浮島イリコ、さらに焼きガキと焼きナスをつつきながら、いつも顔を合わせている人、久しぶりに会う人、初めて会う人と会話をしながら、ゆつくりとした時間を過ごす。

入っては体を冷まし、入っては冷やしして、私は五回も、六回も入った。体全体の毛穴が開いたのか、汗が滝の用に滴る。サラサラにいい汗だ。石室を出ると爽快な空気が迎えてくれる。

広島の人々が来たからとか、近所の旧友が盆休みで帰

っているから誘ったとか、また通りかかりの人も何をやっているのかと覗きに來ては入浴。子供連れも多く、石風呂に入れない子どもたちは、お母さん、お父さんと水遊びに興じる。石風呂以外でも自然を満喫できるのがこの特徴だろう。涼を愉しみながら沢を奥に登れば、不動明王が祀ってあってあり、ちよつとしたトレッキング気分も味あうことができる。また春や秋には山側を通る地家室往還をあるきながら野草観察も楽しめる。十人十色の遊びを見つけて、一日目は約二〇名が入浴にきていただいた。

翌一五日には、前日の石風呂の熱が残っていたので追い焚きはしなかった。春先であれば朝一度火をいれることもある。「二族郎党引き連れて來ました!」と、お盆に帰省した家族を連れて奥井さんがやってくる。去年入ってからヤミツキになりましたというリピーターも多い。徐々に石風呂ファンも増えてきている。この日は約三〇名が來場して、二日間で約五〇名の人が入浴を楽しんだ。

おわりに ―石風呂文化の伝承のために

今回の石風呂入浴の会はいつにもなく盛況だった。石

風呂は一度入るとまた來たくなる。それは自然に囲まれて川のせせらぎを聞き、御大師堂(大島霊場八二番札所)もある石風呂を取り囲むその空間が魅力的だからともいえる。子どもたちは水を掛けあって遊ぶ。石風呂に一度に入れるのは八人ほどだが、みな譲り合って入る。この譲り合いのなから会話も生まれる。

さて、大変好評だった石風呂入浴の会であるが、参加された方の声を拾って今後の課題を考えてみたい。第一に聞かれたのが、広報をもっとして欲しいとの声。焚く時期が早めにわかれば休暇をとってきたいという人もいた。広く周知するのは難しいが、積極的なプレスリリースや、インターネットの利用を検討してもいいかもしれない。また、駐車場のスペースが狭いという声も聞かれた。こればかりはハード面での課題なので、すぐに解決は難しいが、広報のなかで「乗合」をお願いすることで当面は対応したい。

しかし來場者が多くなると、入浴マナーも問題になる。いままでは口コミで広がるのが主で勝手を知った人がはじめての友人と一緒に入るので、入浴マナーを教え合っていた。もしかしたら入浴マナーを教えるようなスタッ

フ、入浴時間を定める時が来るかもしれない。

さらに、いちばん考えていきたいのが準備するスタッフである。これまでは有志の尽力で何とかやってきた。しかし、入浴者のなかには準備の段階から手伝いたいという人が少なからず多い。奥井さんや私もその一人なのだが、そういった裏方仕事も楽しんでやりたいという人たちも一緒になって準備をする、愛着も湧いてくる。それによって石風呂の入浴文化が継承されるのではないだろうか。

最後に、今回も快く石風呂を利用させていただいた地家室石風呂伝承会、ならびに地家室地区の皆さんに、記して心より御礼を申し上げたい。



「天然のアロマ」地家室の石風呂

周防大島奇岩探訪

福田 隆司

子供のころ、よく遊んだ中原神社（地家室）の境内に変わった石（写真①）がありました。「こりや、なにかな」と思いいろんな人に聞いてみましたが、よくわからない。そんな経験をしているせいか、今でも漁に出たときや、車で移動する道すがら変わった形の石、変わった模様の岩、いろいろの石に心を惹かれることがいまもあります。

鹿家の立岩（写真②）に代表されるように、周防大島とその周りにはちよつと変わった石が多くあります。そこで、撮りためた写真の中から私がめずらしいと思う石や岩を紹介したいと思います。



中原神社



中原神社境内にある寄付を記した石碑



写真②



写真①



写真④



写真③



写真⑥



写真⑤



写真⑧



写真⑦



写真⑩



写真⑨



写真⑫



写真⑪

立岩を道から眺めるだけでなく、海岸におりてみると、写真③の鏡餅のような丸を重ねた岩がありました。おそらく、波に洗われてこのような形になったのでしょうか。海や海岸からみると陸から見えないものが見えます。写真④は伊崎の東側の岬です。岩が浸食されて柱のようになっています。柱状節理と言うそうです。伊崎の西側の写真⑤は波の浸食で横縞のようになっていました。また、同じ場所では写真⑥のように地層が、きれいな模様を描いているのを見ることができます。

頭わになる地層に地球の長い歴史を考えさせられます。瀬戸内海は何万年も前に、火山が噴火したり、海底が隆起したり、沈降したりしたとされています。沖家室島のおきにある大水無瀬・小水無瀬の二つの島も海底火山の噴火、隆起と関係のある島だといえます。写真⑦は小水無瀬島です。赤い石がぽつんとくつついているのも面白いですね。

小水無瀬島には灯台がありますが(写真⑧)、そのあたりに機銃掃射の弾丸の跡がのこっているというのを聞いたことがあります。もう一つ小水無瀬には話があつて、写真⑨の写真を見てもらうと、島の上の方に丸い穴が見

えます。この穴が平郡島へ続いているというのです。もちろん、確認した人はいないでしょうが、実に面白い話です。今は柳井市になっている平郡島ですが、周防大島との関係も深く、人の往来も古くからありました。そんな繋がりですが、ちょうど真ん中あたりにある、小水無瀬島の伝説を作ったのかもしれない。しかし、小水無瀬は全くといっていいほど岩ばかりの島です。

大水無瀬も石の多い島で、海岸は黒いごつごつした石でいっぱいです(写真⑩)。ここも火山の噴火を思わせるような岩石がたくさんあります。上陸して島をあるくと写真⑪の岩の間から石がのぞいているのを見ることができました。水無瀬はよい漁場で、大島の漁師はこのあたりによく漁に出ます。漁師の網にはナウマンゾウの骨がひっかかることもあります。写真⑫は橘総合センターに展示してあるナウマンゾウの化石です。

ここで紹介できなかったモノもたくさんありますし、私の知らないモノもまだ沢山あると思います。ぜひみなさんと一緒にいろいろの石の形、種類を楽しみながら島内を散策してみたいと思っています。

(文化交流センター地域交流員)

【活動記録】周防大島文化交流センター日誌

(平成二五年四月～八月)

【四月】

・二〇日 タケノコ掘り体験：雨天のため中止

【五月】

・一二日 地域交流談話会(第一回)

交流センター／一〇時～一二時

地域交流員の活動・グループ活動についての説明

・一四日 平成二五年度小・中学校教育力向上ステップ

アップセミナー

交流センター／一四時～一六時四〇分

小中学校教諭一九名参加

講義「宮本常一を通して学ぶ」

交流センター展示室見学など

・一七日 大阪市立高津中学校体験型修学旅行

交流センター／一五時～一七時二〇分

石臼挽きとクレープづくり／生徒一八名参加

・一八日 畑で遊ぶ！(農業体験)

なぎさ農園／一四時～一六時／一五名参加

海藻肥料を利用したサツマイモの苗植え、イチゴの収穫。なぎさクラブと共催。

・二二日

大阪府忠岡町立忠岡中学校体験型修学旅行

交流センター／八時五〇分～一時五〇分

石臼挽きとクレープづくり／生徒二三名参加

【六月】

・七日

情島中学校へ講師派遣

高木が講師として情島中学校にて授業を担当。

宮本常一写真をみる学習。

・九日

地域交流談話会（第二回）

交流センター／一〇時～一時三〇分

写真資料に関する報告（高木）、年間活動計画の立案。

・一一日

大島中学校へ講師派遣

高木が講師として大島中学校にて地域調査についての授業を担当。授業名「郷土を調べる

―過去・現在・未来の視点―」。

・一五日

畑で遊ぼう！（農作業体験）

なぎさ農園／一四時～一六時／一〇名参加

サツマイモ畑への追肥（海藻肥料）。プラスチ

ックキーホルダーづくりも同時実施。なぎさクラブと共催。

・一六日

地域交流講座（第一回）

交流センター／一四時～一六時

地域交流員養成講座。講義「社会教育と地域の連携―周防大島文化交流センターの目指すもの」、展示室・館内収蔵庫の見学。

・二一日

情島中学校へ講師派遣

高木が講師として情島中学校にて授業。宮本常一写真のなかから調査する写真の選定。

・二二日

梅干と万能梅酢づくり体験

交流センター／一三時～一五時

講師・山本恵津子氏／参加者九名

・二四日

三蒲小学校へ講師派遣

高木が講師として三蒲小学校にて地域調査についての授業を担当。授業名「ふるさとを調べるために」。

【七月】

・五日

情島中学校へ講師派遣

高木が講師として情島中学校にて授業。宮本

常一写真について地元の人から聞き書き。

・ 二 一 日 情島中学校へ講師派遣

高木が講師として情島中学校にて授業。宮本常一写真の現地調査（島内のフィールドワーク）。

・ 一 四 日 周防大島文化交流講座（第一回）

交流センター／一四時～一六時
斎藤潤氏「瀬戸内の島々の潜在資源－無いものなりせずに、在るモノを活かす工夫－」

・ 一 九 日 徳山大学へ講師派遣

高木が講師を担当。「宮本常一」 「旅」のすめ」。

・ 二 一 日 地域交流講座（第二回）／一四時～一六時

地域交流員養成講座。真宮島・下田八幡宮・脊竜寺での現地研修。民具収蔵庫・服部屋敷の見学。

・ 二 二 日 大阪教育大学教授・職員視察

大阪教育大学付属図書館での宮本常一関連展示開催の打ち合わせ。

・ 二 三 日 海藻しおりづくり体験学習

交流センター／一四時～一六時／一〇名参加

海藻しおりづくりの体験学習。地域交流員三名も参加。とうもろこしの収穫と試食も同時実施。なぎさクラブと共催。

・ 二 五 日 情島中学校の展示製作実習

宮本常一写真をもとにした地域調査のまとめ。交流センターにて文化祭で展示するパネル製作。

・ 二 八 日 平成二五年度教職員一〇年経験者研修受入

受講者 田布施総合支援学校教諭一名
三〇日までの三日間に、施設の見学（山根担当）、交流センターおよび博物館・資料館の事業に関する講義、宮本常一撮影写真を利用した実地調査、展示パネルの製作・展示を実施。

・ 二 九 日 八幡生涯学習のむらへ講師派遣

八幡生涯学習のむら／ギャラリートーク
「宮本常一と瀬戸内の旅」にて高木が森本孝氏（元観光文化研究所所員）とともに講師を担当。

【八月】

・一日

大島郡内中・高社会科教員研修

九時三〇分～一二時／参加者五名

交流センター展示室、民具収蔵庫、服部屋敷

の見学：山根が展示説明

・五日

ちゅーピーこどもツアー

海藻しおりづくり体験／交流センター

①一三時二〇分～一四時、②一四時四〇～一

五時二〇分／七日までの三日間実施。合計二

四七名が参加。山根が講師を担当、地域交流

員四名もインストラクターとして参加。

大阪高石市長・阪口伸六氏視察

一四時～一四時三〇／高木説明

・二〇日

体験学習「海の漂着物を調査しよう！」

逗子ヶ浜海水浴場／一四時～一六時

山根が講師を担当、地域交流員二名もインス

トラクターとして参加

・二九日

平成二五年度小・中学校教育力向上ステップ

アップセミナーに講師派遣

久賀歴史民俗資料館／高木が徳毛敦洋氏（八

・三一日

幡生涯学習のむら・学芸担当）とともに講師を担当。

天理大学・安井真奈美氏およびゼミ生視察。

文化と交流 NO. 1

二〇一三年一〇月一〇日 発行

編集 周防大島文化交流センター

発行 周防大島文化交流センター

〒七四二―二五一一

山口県大島郡周防大島町

平野四一七―一一

電話・FAX

〇八二〇（七八）二五一四

【機関誌『文化と交流』に関する投稿規定】

- (一) 投稿できる者は、周防大島文化交流センターおよび周防大島町に所属する者（学芸員・町職員・地域交流員）および編集担当が許可した者に限る。
- (二) 投稿原稿は原則として日本語に限る。
- (三) 投稿原稿は、周防大島をはじめ農山漁村の生活や環境、および周防大島文化交流センターもしくは周防大島町が所蔵する資料に関連したものを主題としていたことが望ましい。ただし、編集担当が適当と判断したものは受け付ける。
- (四) 原稿の字数は原則として八〇〇〇字を上限とする。ただし、編集担当が適当と判断した場合にはこの限りでない。
- (五) ワープロ原稿で投稿される場合は、A4版、三〇字×四〇行、縦書きで作成し、印刷原稿とデータを提出すること。手書きの場合には一マス一字、縦書き、楷書で作成すること。また写真・図版・表などを挿入する場合には必ずデジタルデータ化したものを提出すること。
- (六) 投稿された原稿は、編集担当、または編集担当が指名するオブザーバーによって審査し、できるだけ早く採否を通知する。
- (七) 掲載原稿の著者本人による転載はこれを妨げない。ただし、周防大島文化交流センターへの届け出を必要とする。第三者が転載を希望する場合には著者本人への許諾を得るものとする。
- (八) 本誌に発表された論考等の著作権は、周防大島文化交流センターに帰属する。
- (九) 学術研究および教育目的で本誌の複写を行うことは妨げない。ただし、複製品を第三者が営利を目的として販売することはこれを禁ずる。